

愛語能く 廻天の力あることを

学すべきなり

この句の中に出てる愛語という言葉の精神は、本来ほとんどの人が気付かぬうちに持っていると思います。

それは犬や猫等動物に対する人の優しい行動や態度にあらわれています。

しかしこれが人間同士になりますと、利害が絡み、その時の感情や状態によって出る言葉や態度が変わっていきます。

それは、人を気持ちよくさせる態度と、人を不快にさせる態度の二つに分かれると思います。

気持ちよくさせる態度、すなわちここで言う愛語とは、名前を呼び挨拶をかける、人をほめたり微笑みかける、意見を尊重し、じっくり話を聞くなどであり、その人自身を認め、良い気分させることでもあります。

不快にさせる態度とは、皮肉を言ったり聞こえないふりをしたり、悪口を言ったり、さらには、殴る叩くなど相手を認めない行為で、いやな気分させることです。

大抵の人は不快な気分させる否定的な言葉や行動態度より、愛語の精神にもとづいた言葉や行動態度のほうを喜びます。人は御互いを認め合い思いやりを持つことで、気持ちも通じ合い、生活も仕事もスムーズに行えます。

また、人格や性格は子供の頃に愛語の言葉や態度を多く掛けられたか否かによって決まると思います。ですから、子供たちには、より意識して愛語をかけ、豊かな人間性が育まれるようにしたいものです。

このように愛語を生かせば、家庭でも職場でも会話が弾み、毎日の生活は潤いのあるものになるでしょう。

さらには愛語は、私たちの生き方を良い方向へ推し進める力にもなるのです。

表題の言葉は、曹洞宗の開祖・道元禪師が1243年、宇治の興船寺（こうしゅうじ）において著された『正法眼蔵』の中の一節です。

この巻においては、布施・愛語・利行・同時を旨（むね）とする菩薩としての行いが述べられています。（修証義第4章を参考になきつても宜しいと思います）

『愛語能く廻天の力あることを学すべきなり』とは、愛語には人を幸せにするだけでなく、国家、世界をも動かしてしまうほどの力があることを知りなさいということなのです。

この言葉から、道元禪師が愛語という菩薩の行いに極めて大きな力を観じていたことがわかるのではないのでしょうか。

愛語能く
廻天の力

あることを

学すべきなり

正法眼蔵

菩提薩埵四摂法

曹洞宗

神奈川県第二宗務所
第五教区 布教部・出版部